

上映映画解説

1953, 12~1954, 1

国立近代美術館 フィルム ライブラリー



No. 15

Von Morgen bis Mitternacht

「朝から夜中まで」鑑賞会について

フィルム・ライブラリーでは、その事業の一部として、歴史的価値のある芸術性豊かな映画を鑑賞し研究する会を開催しております。今回はその第七回として開設一週年を記念して「朝から夜中まで」をとり上げることになりました。

「朝から夜中まで」は、一九二〇年（大正九年）ドイツのイラック・フィルムで製作され、表現主義戯曲作家ゲオルク・カイザーの同名戯曲を基にして、カール・ハイント・マルティンが監督して作られたもので、ローベルト・ヴィーネの「カリガリ博士」「罪と罰」等と共にいわゆる表現派映画の代表的な作品で、同時に第一次大戦後のドイツ・サイレント映画最盛期の傑作の一つです。我が国では、一九二二年一月三日から本郷座で封切られ、当時の映画界に可成りの影響を与えました。

朝から夜中まで 五巻

一九二〇年度独イラック映画

——スタッフ——

原作……………ゲオルク・カイザー

脚色……………ローベルト・ヘッパツハ

監督……………カール・ハイント・マルティン

撮影……………カール・ホフマン

——キャスト——

現金出納係……………エルネスト・ドイツチ

婦人……………エルナ・モレナ

若い紳士……………H・フォン・トワルドウスキー

銀行頭取……………エベルハルト・ヴレーデ

太った男……………エドガール・リコー

祖母……………フリーダ・リヒャルト

妻……………ロッテ・シュタイン

From Morning Till Midnight In5 Reels
(Von Morgen bis Mitternacht)

The Cashier……………Ernest Deutsch

The Lady……………Erna Morena

The Bouncing Gent……………H. von Twardowski

The Bank Manager……………Eberhard Wrede

The Fat Man……………Edgar Licho

Grandmother……………Frieda Richard

The Wife……………Lotte Stein

Story by Georg Kaiser.

Scenario by Robert Heppach.

Directed by Karlheinz Martin.

Photographed by Carl Hoffmann.

当時のキネマ旬報第一一九号（一九二二年一月一日号）はこの映画の紹介文を載せ、「（略勝）或銀行へ一日美しい婦人が為替を取りに来た。銀行の現金係りは其美貌に迷ひ銀行の金を盗み出し、暖い家庭を迄棄てて其婦人と暮さうとした。然し道徳堅固な其婦人は断然之を却けた。失望した彼は、今更犯した罪を後悔したが如何とも詮方なく、盗んだ金をあらゆる事に使ひ果し、遂に救世軍に救はれた。併し身に犯した罪の苛責に堪えず自殺したのであった。（松竹輸入）——と報じています。

又封切当時の批評としてキネマ旬報第一二二号（一九二三年一月一日号）は「恐らく今日迄に紹介せられた表現派映画中最良のものであり、且表現派の使命をよく尽して居る映画ではあるまいかと思ふ。然し表現派云々の事は識者に譲つて此処には単に本映画より受けた感銘を綴るに過ぎない。原作は名立たる表現派劇作家ゲオルク・カイザー氏の手になつたものである。氏の戯曲では既に「カレーの市民」が我が国にも沢正（註＝沢田正二郎）一座によつて紹介せられてゐる。

る。映画となつたものは此原作を要領よくコンテンスし且つ巧みに映画化して居るらしい。而して全篇一の場もなく緊張に次ぐ緊張を以て終始して居る。自由に自由の間人となつた男がさて世の中に救を求めて行く。併し到る所に幻滅と落胆とを経験する。救世軍に於てすらも救ひは得られなかつた。而して絶望のどん底に陥つた男は自殺してしまふ。何処の一片を取つても生々しい鮮血の滴る人生が見られる。そ、り立つ奇しき力が嫌が上にも動き廻る人生の姿を示して居る。救ひを求むる心がその中を馳け廻る。而して人生の此処彼処へと觸れる。而して再び新しく人生の事実を物語る。赤裸々な人生の姿が眼の前に展開される。今迄の表現派映画——「カリガリ博士」でも又「ゲニーネ」でも——は運びがまだるっこい気がした。併し此映画はそうではない。マルティン氏の監督は生々して居る。鋭い所が到る所に至されてゐて而して無駄が少しもない。俳優もよく生かして使ひ、それを又背景にピツタリと調和させて動かしてゐる。動と静とがよく調和してゐるし又一つ一つの場面として纏まつてゐる上に連続しての映画としても成功してゐる。運びの速さがよく此映画に非常に力を与えてゐた。印象は極度に強められてゐる。家や道具等を乱暴に（勿論さうではあるまい。併しそう見える）書きなぐつたのが何んなに此映画に調和して居た事であらう。俳優は何んな端役を演る人に至る迄皆よく統一せられて居た。而して皆映画にシツクリと当てはまつてゐる。而して此処まで考へて来た時に筆者は再び主役を演じたドイツチ氏に讃辞を呈したいのである。あの印象深い扮装、あのよく役の性格を呑込んだ細心の過度に渉らざる演技、而してあのおびえた様な又いどむ様な底光りのする眼、兎に角、此映画は記憶さる可き映画である。そして又是非とも一見すべき名画である。好い所を挙げたら切りがない。骨董屋の主人のノコノコした演技に比

してセカセカした青年の足取り手付き其処に於ける巧みな二つの動作の調和、及二人の明確な心理描写それから又一氣になぐり書きした家に主人公が入つて行く時の背景と人物の調和やそれより生ずる気分、或は又競走場のある確かな鋭い描写、等等、兎に角見なければ分らない。字幕も又いい。——と評しています。

(引用文の仮名づかいすべて原文のまま)

表現派について

ひろい意味で表現主義(エクスプレッショナルイズム)といえ、内部的体験を主観的に、あるいは意力的に表現しようとする二十世紀の大きな芸術思潮であつて、今日でもそれはいつも問題になる。しかし日本の訳語で表現派とよばれている狭義のイズムは第一次世界大戦前後を頂点として、主にドイツを中心起つた特異な芸術運動をさしている。絵画でいえば、その源流はやはりムンクやゴッホやホドラーなどの北歐系の芸術に発しているのであるが、色彩の感情的な単純化、形のリズム的強調といった性格を受けつきながら、ドイツの表現派はさらに時代の苦悩や激動を反映して、感情を投げつけるような烈しい芸術様式を生んだ。ここではその系統に一々ふれるわけにゆかないが、それは孤立したものでなくて、立体派や未来派や野獸派や構成派とまじり合つて複雑な様相を呈している。ただ表現派様式はナチスの抬頭によつて抑圧され、各国に分散してしまつた。

こうした表現派の動きは美術ばかりでなく、音楽ではシェーンベルクの「月光のビエロ」のような作品を生んでいるし、文学、殊に演劇では烈しい形式打破の運動となり、ハイゼンクレーフェルやトルラーの詩的な独白形式、カイザーの社会的告発の劇などが現われた映画。でもそれを反映して有名な「カリガリ博士」のような記念的作品を生んだのだが、ほとんど上映される

「朝から夜中まで」も典型的な作品といつてよい。原作はカイザーの舞台劇で、演出のマルティンは表現派演出の開拓者であり、その様式はピスカトールの先驅をなした人であるという点で特に注目される。表現派映画はいわゆる純粹映画風の前衛映画とちがつて、いちじるしく舞台劇的であり、むしろ演劇運動の一面面として起つたものと見るべきだろう。背景は表現派の絵画様式をうつして書割り風になり、人物は一種の線り人形のように扱われるところに特長がある。要するに誇張された雰囲気なのかの誇張された人間告白なのであつて、断絶した一時代の背景を考えないでこの映画を見ることはできないだろう。

(フィルム・ライブラリー運営委員——滝口修造)

なお、フィルム、ライブラリーの特別映画鑑賞会でとり上げた映画は次のとおりです。

第一回「ジークフリート」 一〇巻

(一九二四年、独ウファ映画、監督フリッツ・ラ
ンク)

第二回「ヴァリエテ」 一〇巻

(一九二五年、独ウファ映画、監督E・A・デ
ボン)

第三回「アッシャー家の末裔」 五巻

(一九二八年、仏、監督ジャン・エプスタン)

第四回「ジゴマ」 四巻

(一九二一年、仏エクレール映画、監督ヴィク
トラン・ジャッセ)

第五回「美と力への道」 一〇巻

(一九二五年、独ウファ文化映画、監督ヴィルヘ
ルム・プラーゲル)

第六回「寒椿」 七巻

(一九二二年、国活角苦映画、監督畑中藜坡、主
演井上正夫・水谷八重子)